

訳者あとがき

本書は Romano Guardini, "Vorschule des Betens" の邦訳である。原書初版は一九四三年に公刊されているが、邦訳するにあたって 9. Auflage 1990, unveränderter Nachdruck der 7. Auflage, Einsiedeln; Benzinger Verlag 1964. 2. Auflage der Werkausgabe 1990 Matthias-Grünwald-Verlag, Mainz, Verlag Ferdinand Schöningh, Paderborn を底本として使用している。他に英訳本 "The Art of Praying" - The Principles and Methods of Christian Prayer (Formerly entitled "Prayer in Practice") 1994 Sophia Institute Press Manchester を参照した。

生前既に「生存するドイツ最大の教育者」、「われわれと同じ時代に生きている教父」との評価を得ていたロマーノ・グアルディーニが生まれたのはイタリアのヴェローナにおいてである（一八八五年二月十七日）。満一才になるかならないかの頃、外交官であった父親の任地の関係でマインツに移り、そのままドイツで育つことになるが、長じてのち自らの意思でドイツに帰化して

いる。

大学では最初化学と経済学を専攻するが、召命を感じてドイツのフライブルクとテュービンゲンで神学を学び、一九一〇年マインツで司祭に叙階された。暫く司牧に携わったあと、教区から休暇を得て神学の研究に戻り、フライブルク（ドイツ）で学位を、さらにボンで教授資格を取得した。一九二二年ボン大学で私講師を勤めたあと、一九二三年からナチス政権によってその地位を追われる一九三九年までベルリン大学（いわゆるフンボルト大学）において、彼のために開設されたと言ってもよい独立講座「宗教哲学とカトリック世界観」を担当した。戦後は一九四八年からテュービンゲン大学、一九五一年以降はミュンヘン大学において、それぞれ彼のために特設された同様の講座を担当した。一九六八年十月一日ミュンヘンにおいて帰天。遺体はいったんは同市のオラトリオ会墓地に埋葬されたが、一九九七年、生前縁の深かったルードヴィヒ教会の書簡側脇チャペルに改葬された。

邦語によるグアルディーニ紹介としてはミュンヘン大学グラープマン研究所の元所長、W・デットロフ教授による紹介が上智学院・新カトリック大事典編纂委員会編の『新カトリック大事典』第二巻（研究社刊、一九九八年）の五五九頁にある。（そこでの表記はグアルディーニ。なお、なぜかミュンヘン大学とテュービンゲン大学における在任期間が逆になっている。）

信徒数においてはプロテスタントが圧倒的に優勢なベルリンの地に設けられたカトリック講座、

それも大学のどの学部に属さない（いわば大学直属の）独立講座という特異な地位の故もあって、グアルデイーニは、その神学を展開するにあたっては、神学部において通常行われているスタイルを採らず、ヨーロッパ精神史に大きな足跡を残した哲学者や作家、思想家を順次取上げ、彼らと具体的な対話を進めつつ彼らを理解し位置づける試みの中で、カトリックの立場を明確にしていくという手法を採用した。この作業の中で生まれた一連の評論は、神学的価値のみでなく対話相手となっている人々それぞれの属する分野においても高く評価されていることは周知の通りである。

ここに訳出した著作においても明確に読み取れるように、一方では勃興しつつあった典礼再生運動に敏感に呼応し、理論的にも実践的にも教会とその典礼の上にキリスト者の霊生を据え直すべく努力するとともに、他方では「信徒のなかで教会が目覚めていく」という標語に代表されるグアルデイーニ独特のバランス感覚に満ちた広範な著作活動を展開することによって、他のキリスト教諸派、さらには他の諸宗教に対しても開かれたものとなっていた今世紀中葉の欧州カトリック精神世界の潮流の形成に大きく寄与したことは、教会に対する彼の貢献の第一として特記すべきであろう。

さらに、グアルデイーニの司牧者としての自覚は、彼が教壇上のみに止まることを許さなかった。信徒の信仰心を鼓舞する多数の著作もさることながら、ミュンヘン時代、実質的に大学付属聖堂の役割も果たしていたルドヴィヒ教会において、学生向けのミサと説教において日曜ごと

に聖堂を若い人たちで満杯にしたことは永くミュンヘンっ子の語り草となっている。

一九六五年二月一七日、既に退官していたグアルデイーニのために、ミュンヘン大学の数ある教室の中でも最も壮麗な「大学講堂」(Grosse Aula der Universität)におおむその八十回目の誕生日を記念する学術的祝賀会が開かれたが、講座の直接の後継者として超満員の参会者を前にその日の祝賀講演を行なったK・ラーナーも、典礼運動、エキュメニズム、青少年教化活動におけるグアルデイーニの功績を特に称揚していた。

グアルデイーニの没後、その著作と遺稿は蔵書とともに遺言書の趣旨に則ってバイエルン・カトリック・アカデミーに寄贈された。管理全般についての直接責任は、著作について配慮するよう生前の本人から直接口頭で依頼を受けていたデットロフ教授を含む三人の委員に委ねられることとなった。そして、遺稿がグラープマン研究所に搬入された時期に研究所の助手を勤めていたH・メルカー教授らの手で遺稿の整理・刊行や既刊著作の再刊行の作業が現在も続けられている。

神学者グアルデイーニの主著は『主——イエス・キリストの人と生涯についての黙想』（初版一九三七年。まだ邦訳はされていない。）であると言われている。「黙想」と仮訳した語は、学問領域では通常は「考察」と訳されることが多い語である。しかし、あの著作の底に流れているのは、神学的考察は最終的にはすべて祈りへと収斂し移行していくべきであるとの主張である。そして、ここに訳出した本書においては、その祈るということが直接の主題となっている。

本書は、ゲアルディーニがベルリン大学を追われ、南独メミンゲンに近いモースハウゼンの友人の許に身を寄せていた時期に執筆されている。ナチス政権下のドイツのカトリック教徒に宛てられたピオ十一世の回勅『ミット・ブレネンダー・ゾルゲ』（『焦眉の憂慮をもって』一九三七年）を想起させるいくつかの記述を別にするなら、当時の政治状況や、この時期の著者の境遇を直接感じさせる記述は本書にはない。しかし、本書が、ドイツを自らの意思で祖国と選んでいた人物によって、そのドイツの歴史の最も暗い部分に差し掛かっていた時期に、それも自らもその厄災の渦中にある人物によって書かれたことを考え合わせるとき、本書のいくつかの簡潔な表現に込められている真剣さがどれ程のものであったか、読む人に襟を正させるものがある。

本書はゲアルディーニが、祈るということがキリスト者の生活において持っている意味を根本的かつ包括的に問い直し、解説した名著と言われている。原題は直訳するなら、祈ることを学ぶ学校への入学準備学級、祈りの学校に入学するまでには既にしっかりと身に着いている筈のことを教えて貰える塾のようなものを意味する。原著者が繰り返し明言するように、最も基本的、基礎的事柄が、それも当時のドイツのカトリック教徒の平均的生活状況を背景として語られている。第二ヴァティカン公会議以降の教会の動きを身をもって体験してきた読者の中には、一、二の点で戸惑いを感じたり、何をいまさらと感じる向きもあるかも知れない。しかし、われわれがいま目の前にしている姿へと教会を動かしてきた大きな流れの源流の一つが本書にあると言っても過言ではないのである。それ以上に、キリスト教が真に根を下ろしていた時代を過去に持っているとは必ずしも言い切れないわが国のような社会にとっては、キリスト教的、カトリック的な意味

においては祈るとはどういうことなのかを基本に遡って解説している本書の持つ意義は決して小さくないと考えられる。

本書訳出の直接のきっかけとなったのは、デットロフ教授が『新カトリック大事典』のゲアルディーニの項を担当されたことを機に、一九九三年十月二十三日、東京・目黒の聖アンセルモ教会の信徒会館において同教授と上記のメルカー教授を迎えて開催されたゲアルディーニ・セミナーであったと言っただけであろう。散会后に行われた主宰者との歓談の中で、誰言うともなく、ゲアルディーニの著作のいずれかを翻訳・紹介しては、という話になった。その後暫くしてH・エンデルレ氏を介して具体的に本書訳出の話が寄せられてきた。

その前年、カトリック教会のいわゆる『新カテキズム』が制定・発表されていた。一九九二年まずフランス語で公刊されて以降、順次各言語で刊行された『新カテキズム』（ドイツ語版は一九九三年、ラテン語版“Catechismus Catholicae Ecclesiae”は一九九七年）は、その二五七八番において「少年サムエルは『主のみ前でどのように身を処したらよいのか』をその母親から学んだ」と述べているが、この部分をドイツ語版は「主のみ前における母ハンナの態度は少年サムエルにとって『祈りの学校』であった」と訳出している。さらに『新カテキズム』自体も二六八九番において「祈りのための種々のサークル」を「祈りの諸学校」と呼んでいる。このような言葉遣いの上での近親性のみでなく、内容においても構成においても——カテキズム本体の中に「祈ること」がいわば公式にその座を得たこと自体は別にしても——ゲアルディーニの『祈ることの入学準備学級』と『新カテキズム』における祈りについての記述のあいだには、おそらくは成立

史的にも近親性を検証することがさして困難でないのではないかと推測させる程の類似性、並行性が観察される。本書訳出の契機の第二である。

本書の訳出、特に訳注作成にあたっては上智大学のK・リーゼンフォーバー教授、フランシスコ会聖書研究所のB・シュナイダー師、聖カタリナ女子大学の竹島幸一教授、そのほか独文専攻の諸先輩など数多くの方々のご指導をいただいた。なканずくデットロフ教授にはこの「訳者あとがき」に取り上げた諸点も含めて数次にわたって懇切なご教示を受けた。改めて衷心からの謝意を表したい。

また、本訳書刊行にあたっては、デットロフ教授のご仲介によってミュンヘン・フライスィング大司教区のフリードリッヒ・ヴェッター枢機卿とミュンヘン・ミッシェン会、さらに同枢機卿のご尽力によってドイツ教区連盟(VDD)から資金面のご援助をいただいた。これらのご支援なくしては本訳書の刊行は不可能であった。この紙面をお借りして心より感謝申しあげたい。

昨今の厳しい諸条件にも拘らず、本書刊行の労を惜しまれなかったエンデルレ書店のH・エンデルレ氏、および編集と校正の細い作業を引き受けてくださった同書店の清水朱美氏にも心からの敬意と謝意を表明したい。

原注と訳注について読者の方々のご了解を願っておくべきかもしれない。

原注はその大部分が原著者ガルディーニ自身の他の著作における関連箇所を示すものであり、その殆どがまだわが国では紹介されていない現状から、省略することも考えられたが、デットロ

フ教授のご助言にもとづいて、将来に備えてすべてそのまま転載した。

訳注には、原典にない出典を補ったものと、語義を解説したものがある。

原典では、聖書からの引用を別にして殆ど出典が示されていない。これは、一方では、本書の読者層として想定されていた一般の信徒の方々のために煩わしさを避けようとの意図が働いた故と思われるし、他方では、本書に取り上げられている程度のもものは専門家の方々には不要の筈との判断があったためと考えられるが、訳出するにあたっては、幾つかについてあえて訳注として巻末にまとめた。

原著者は高度のドイツ語力を駆使して、複数の意味を持つ言葉を意図的に使用したり、懸け言葉に近いような選語を行なったりとすることを随所で行なっている。訳者のドイツ語力および国語力の不足の故に、原語と同じような内容と外延を持つ訳語を見出すことは不可能であった。ために、幾つかについては訳文本体において「」内に字句を補ったり、訳注として語義説明を加えるなどした。

最後に訳者の理解の浅薄さ、訳文の拙劣さが、ガルディーニ本人が読者の方々に直接語り掛けるための妨げとならなかったことを祈りたい。

一九九九年聖ペトロ・聖パウロ使徒の祝日に

京都・岩倉にて

訳者

訳者紹介

やまべ けん
山辺 建

1936年長野県生まれ

上智大学文学・神学修士、

ミュンヘン大学 Dr. theol.

現職 京都産業大学外国語学部教授

祈るとは…

2000年3月20日 第1版1刷発行 ©

訳者 山辺 建

発行者 エンデルレ ハンス ルーペルト

発行所 有限会社エンデルレ書店

〒160-0004 新宿区四谷1-18 オオノヤビル2F

印刷 株式会社東神堂

ISBN 978-4-7544-0276-1 C0016 ¥2400E